

鞠智城跡

—第26・27次調査報告—

2006年3月

熊本県立装飾古墳館分館
歴史公園鞠智城・温故創生館

鞠智城跡

—池ノ尾門跡及び貯水池跡堰堤部の調査における中間報告—

2006年3月

熊本県立装飾古墳館分館
歴史公園鞠智城・温故創生館

序 文

鞠智城跡は、東アジア情勢が緊迫した7世紀後半に、大和朝廷により築城された古代山城の一つです。全国でも有数の重要な遺跡として、平成16年2月27日付けで国史跡に指定されました。同様の遺跡として、九州では、大野城跡(福岡県)、基肄城跡(佐賀県)、金田城跡(長崎県)の三城があり、いずれも国の特別史跡に指定されています。

現在、熊本県教育委員会においては、遺跡の保存と活用を図るため、平成12年度から県総合計画での「歴史公園の完成をめざして」を目標に、発掘調査の継続と、その成果に基づく整備事業の推進に取り組んでおります。

本書は、昨年度及び今年度の2カ年にわたり実施した第26・27次調査の成果をまとめたものです。

発掘調査の実施にあたりましては、文化庁及び鞠智城跡保存整備検討委員会の諸先生方から御指導をいただくとともに、山鹿市教育委員会並びに菊池市教育委員会、また、地元の皆様など多くの方々の御協力を賜りました。ここに厚くお礼を申し上げます。

平成18年3月31日

熊本県教育長 柿塚純男

例　　言

- 1 本書は熊本県教育委員会が平成16・17年度に実施した国庫補助事業の発掘調査報告書である。
- 2 調査の実施にあたっては、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」が担当した。
- 3 調査期間は、平成16年度を平成16年7月26日から平成17年3月30日まで、平成17年度を平成17年6月29日から平成18年3月24日までの期間で実施した。
- 4 現地調査での遺構実測・写真撮影・遺物の取り上げについては主に調査員が行い、遺跡地形測量図作成等については株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店の補助、空中写真撮影及びオルソ画像図作成については九州航空株式会社の補助があった。
- 5 遺物の整理・実測及び遺構のトレースについては矢野裕介が担当し、川上寧子、菊川直美、青木絵美の補助があった。
- 6 本書の執筆は矢野が行った。
- 7 本書の編集は、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」で行い、矢野が担当した。

凡　　例

- 1 本書に使用した方位とグリッドについては日本測地系（旧国土座標）を使用した。
- 2 現地での図面の縮尺は、遺構等の平・断面図を1/10、1/20、遺跡地形測量図を1/100とした。
- 3 検出遺構のうち石壙の計測値については、オルソ画像図(1/50)から読み取ったものを使用した。
- 4 掘団のうち、第9～15図及び第17図については、オルソ画像図を使用した。

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯とその組織	1
1 調査に至る経緯	
2 調査の組織	
第2節 調査の方法と経過	5
1 調査の方法	
2 調査の経過	
第3節 池ノ尾門跡について	9
1 これまでの成果	
2 立地について	
第Ⅱ章 調査の成果	
第1節 池ノ尾門跡の調査	15
1 周辺の環境について	
2 遺構の検出状況について	
3 石垣	
4 土塁	
第2節 貯水池跡の調査	36
1 堀堤推定部について	
2 集石の状況	
第Ⅲ章 総括	
第1節 池ノ尾周辺の外郭構造について	43
1 石垣について	
2 外郭線について	
第2節 物智城跡における外郭構造の今後の課題	45
(参考) 馬こかしの石垣・三枝の石垣について	47

挿図目次

第1図 鞠智城跡全体図	3
第2図 池ノ尾門跡トレンチ配置図	4
第3図 池ノ尾門礎石	10
第4図 池ノ尾門礎石付近南壁上層略図	10
第5図 池ノ尾門礎石周辺地形図	11
第6図 鞠智城跡周辺地形図	12
第7図 大門～池ノ尾周辺地形図	13
第8図 池ノ尾門跡周辺地形図	17～18
第9図 池ノ尾門跡遺構配置図	19
第10図 石壙	20
第11図 石壙前面	22
第12図 前面石列	23
第13図 石壙背面	25
第14図 背面石列	26
第15図 通水溝	29
第16図 取水口	30
第17図 取水口～導水溝	32
第18図 土壙全体図	34
第19図 土壙見通し断面	35
第20図 土壙断ち割り断面	36
第21図 墓堤推定部位置図	37
第22図 墓堤推定部周辺地形図	39～40
第23図 墓堤推定部集石状況	41
第24図 池ノ尾門跡周辺における外郭線の推定	41
第25図 馬こかしの石垣	48
第26図 三枝の石垣	49

図版目次

- 図版 1 池ノ尾門跡遠景（東から）
池ノ尾門跡近景（北西から）
- 図版 2 池ノ尾門跡調査区全景（東から）
池ノ尾門跡調査区全景（真上から）
- 図版 3 池ノ尾門跡石壙全景（真上から）
- 図版 4 池ノ尾門跡石壙（オルソ画像図）
- 図版 5 前面石列①（北東から）
前面石列②（北西から）
- 図版 6 石壙前面北東側①（東から）
石壙前面北東側②（北から）
- 図版 7 背面石列①（北西から）
背面石列②（南東から）
- 図版 8 石壙背面①（北東から）
石壙背面②（南東から）
- 図版 9 石壙背面と通水溝（東から）
通水溝全景（南東から）
- 図版 10 通水溝取水口（南東から）
通水溝側壁（南西から）
- 図版 11 取水口と導水溝（南から）
導水溝側壁（北西から）
- 図版 12 土壙全景とその周辺（北東から）
- 図版 13 土壙全景（東から）
土壙基底部における敷石状況（東から）

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯とその組織

1 調査に至る経緯

鞠智城跡における発掘調査は、昭和42～44年度に実施した、当時熊本女子大学教授であった乙益重隆氏を調査団長とする「鞠智城調査団」による第1～4次調査に始まる。それ以降、鞠智城跡の全容解明に向けて、一部空白期間はあるものの、文化庁国庫補助事業としてほぼ継続的に発掘調査を実施してきた。これまでに、古代山城では類例をみない八角形建物跡をはじめとする72棟分の建物遺構、5,300m²の広大な規模をもつ貯水池跡や版築盛土の土壠など、鞠智城の城構造の解明に伴うデータが徐々に蓄積されてきている。これら調査成果に加え、平成16年2月27日付で国指定史跡「鞠智城跡」となり、全国有数の遺跡として周知されるに至っている。

現在の発掘調査は、平成6年度から始まった鞠智城跡の歴史公園化に向けた鞠智城跡整備事業のなか、歴史公園の完成を目指した『第2次鞠智城跡保存整備基本計画』(平成14年3月策定)に基づき進めている。当計画には、鞠智城跡の全容解明に向けた取り組みとして、発掘調査及び調査研究の基本方針及びそれに基づく平成23年度までの年次計画が掲げられた。なかでも発掘調査では、①貯水池跡、②城門跡、③土壠線の構造解明という、3本の調査方針のもと年次計画が立てられている。第26次、第27次調査では、その年次計画に基づき「池ノ尾門跡」と「貯水池跡」の調査を実施した(第1図)。実施年度は、第26次が平成16年度、第27次が平成17年度となる。

池ノ尾門跡については門構造及び遮蔽構造の解明を、貯水池跡については池跡北端に位置する池尻部分の遺構等の把握を主目的としたものである。特に、池ノ尾門跡においては、第1次調査において一部掘開を伴う調査を実施し、門礎石の原位置の推定や遮蔽構造として石壠の想定などが報告されており、この調査成果を視野に入れた調査を実施することとなった。

2 調査の組織

1) 発掘調査 (平成16・17年度)

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 小田信也(熊本県立装飾古墳館長)

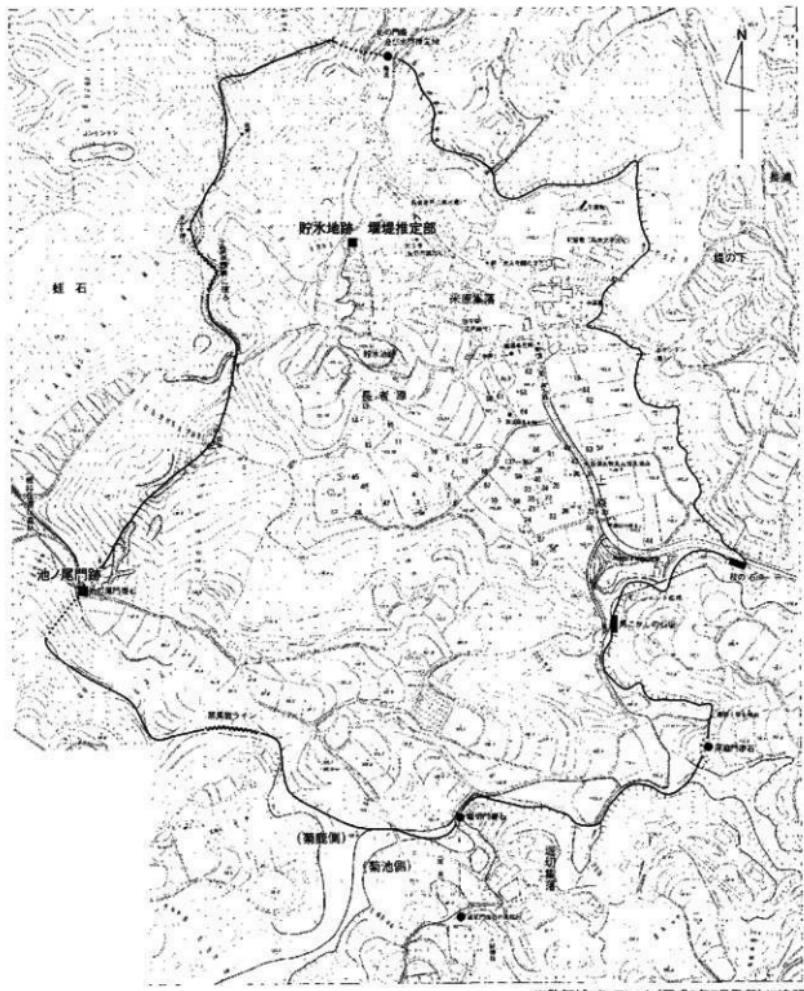
調査総括 大田幸博（同副館長 兼歴史公園鞠智城・温故創生館長）
調査事務 廣瀬泰之（同文化財整備交流課長）
小佐井栄一（同主任主事）
調査担当 村崎孝宏（同参事）
矢野裕介（同主任学芸員、主査）
中山 圭（同嘱託、平成16年4月～平成17年12月）
調査指導 河原純之（川村学園女子大学人間文化部教授）
岡田茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）
安原啓示（元文化庁主任調査官）
小田富士雄（福岡大学名誉教授）
板楠和子（九州ルーテル学院大学教授）
小西龍三郎（元九州造形短期大学デザイン科教授）
坂上康俊（九州大学大学院人文科学研究院教授）
今村克彦（熊本城復元専門員）
西谷 正（九州大学名誉教授）
日野尚志（佐賀大学名誉教授）
出宮徳尚（岡山市教育委員会生涯学習部文化財専門監）
秉岡 実（岡山市企画局文化政策課博物館副専門監）

（以上、順不同、敬称略）

調査協力 山鹿市教育委員会
菊池市教育委員会
山鹿市菊鹿町米原区
菊池市堀切区

2) 報告書作成（平成17年度）

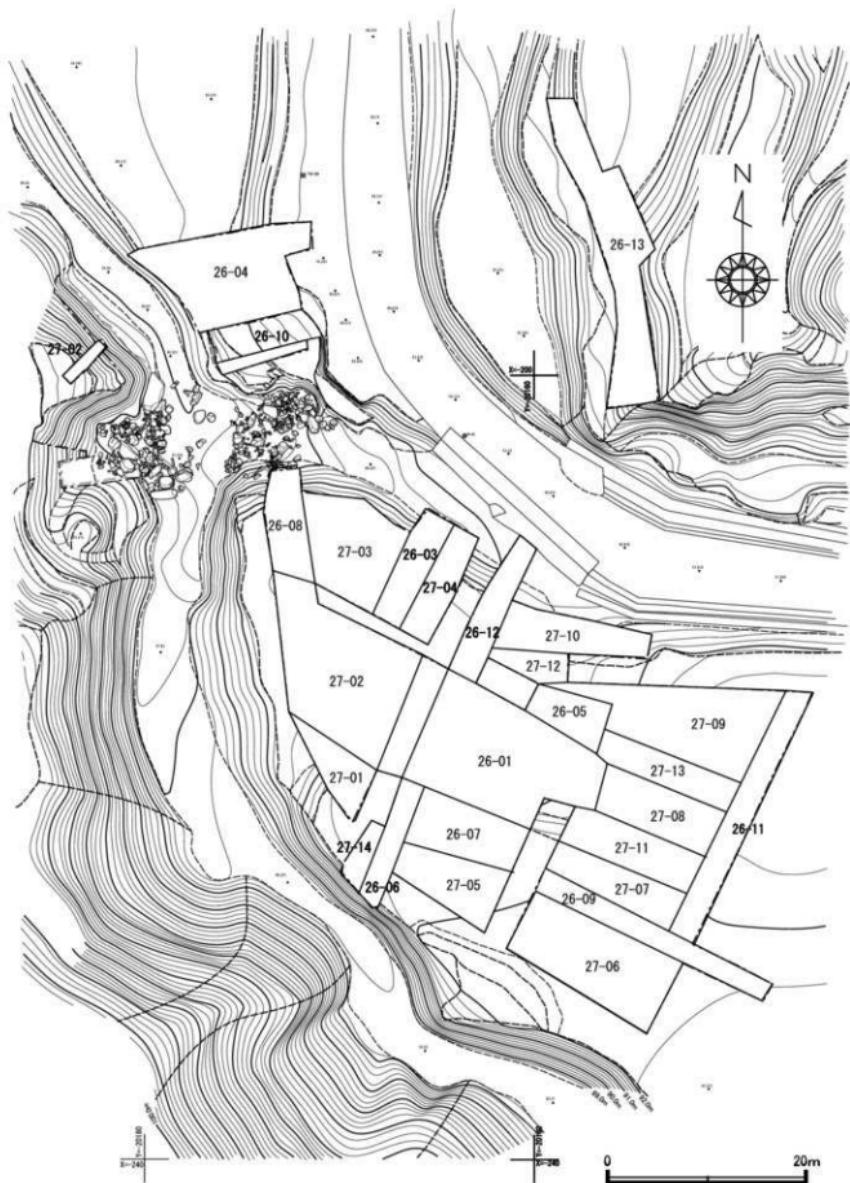
責任者 小田信也（熊本県立装飾古墳館長）
総括 大田幸博（同副館長 兼歴史公園鞠智城・温故創生館長）
担当 矢野裕介（同主任学芸員、主査）
堀 緹（同嘱託、平成17年4月～9月）
大村ひかり（同嘱託、平成17年10月～平成18年3月）



*鞠智城パンフレット(平成9年7月発行)に追記

0 200m

第1図 鞠智城跡全体図



第2図 池ノ尾門跡トレンチ配置図

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

1) 池ノ尾門跡の調査

第26次調査におけるトレンチの設定にあたっては、現地踏査及び第1次調査における成果を踏まえ、調査員協議のもと現地形において遺構の把握に適当な箇所を選定した(26-01、02 トレンチ)。その後、26-01 トレンチの調査が難航したことから、遺構及び層序等の把握のため適宜、26-01 トレンチ北東側の北側水路西岸に 4 箇所(26-03、05、08、12 トレンチ)、南西側に 2 箇所(26-06、07 トレンチ)、南東側に 2 箇所(26-09、11 トレンチ)を設定した。さらに、26-02 トレンチの遺構の検出状況から、塩井川対岸にも同様な構造が認められるかどうか把握するため、2 箇所(26-04、10 トレンチ)を設定した。また、北側尾根の上層を把握するため、その西法面に 1 箇所(26-13 トレンチ)を設定した。各トレンチの形状及び規模については、自然地形あるいは調査目的に応じて相違した。なお、トレンチ番号については、調査を開始した順に付した。

第27次調査では、遺構の全体的な把握を目的に、26-01、03、05～09、11を包括する調査範囲を設定した。このことから、土層確認のためのベルトを数本残したほかは既トレンチ間を埋めるような形で、当初、9 箇所(27-01～09)を設定した。さらに、調査の進捗上、不要と判断したベルト部分についても、トレンチとして 3 箇所(27-10～12)を新設した。(第2図)

調査における土砂の掘削・運搬については、想定された遺構の状況及び地形の制約から、すべて人力によることとした。掘削については慎重を期し、砾・石の取り上げについては、遺構の構成石材かどうかを判別するため小トレンチで層序を確認しながら実施した。なお、第26次調査でその判別に多大な時間を要した遺構を覆う上層が、結果的に後世の堆積であることが判明したため、第27次調査では、その土層に含まれ、さらに下部遺構との連続性が認められない砾・石すべての取り上げを実施した。

遺構等の実測のうち、遺構の主要部については、光波測距機により 1 m メッシュを組み、手作業で 1 / 10 の図面を作成することとし、周辺地形の測量(1 / 100)及び遺構実測(1 /

20) の一部を委託した。出土遺物については、遺構あるいは遺構面直上において検出したものについては出土地点を記録して取り上げ、このほか、遺構に伴わない遺物については出土層位のみ記録して取り上げを実施した。遺構等の写真撮影については、中判(6×7)、35mmのカメラを使用し、各カットにつきリバーサル、白黒フィルムの双方で撮影した。また、地上からの撮影では困難なアングルについては、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を、さらに、将来的な図化を見越したオルソ画像図の作成も委託した。

2) 貯水池跡の調査

貯水池跡の調査は、池跡北端に位置する池尻部分の構造把握を目的とする調査を実施する予定であった。結果的に、池ノ尾門跡の調査に多大な時間を要したため、第26次調査時に、周辺地形の測量(1/200)と集石箇所の図化(1/40)のみを実施した。測量にあたっては、事前に人力による除草等の作業を実施した。

2 調査の経過

1) 平成16年度

第26次調査は、平成16年7月26日から平成17年3月30日までの期間で実施した。当初の計画では、池ノ尾門跡、貯水池跡の順で調査に入る予定であったが、池ノ尾門跡に多大な時間を要したため、結果的に、貯水池跡においては調査区周辺の地形測量等の図化作業のみ実施した。

池ノ尾門跡においては、まず、調査区周辺の除草等、事前の環境整備を実施した。除草作業にあたっては、現地形から周辺の外郭ラインを推定する目的で、尾根筋に南側土壠線が走る南東側斜面や灰塚に至る北東側斜面など広範囲に実施した。

平成16年8月3日より、26-01トレンチの掘削を開始した。当該トレンチは、第1次調査で確認された集石箇所を包括するトレンチで、それら集石の露出作業から始めた。と同時に、塩井川と北側水路の合流地点の掘削を開始した。合流地点には多数の石が散在しており、その中に門礎石らしき大石も認められたが、結果的に、軸摺り穴は確認されなかった。26-01トレンチにおいては、集石が広範囲に及ぶことが判明しつつ

あったが、比較的硬質の青灰色土で覆われており、その土砂が盛土か後世の堆積土かの判断がつかず、以後、小トレンチ等で層序の把握に努めると共に、26-03、05、06、07トレンチにより層序と集石の範囲把握の作業に多大な時間を要することとなった。

8月26日より、塩井川と北側水路との合流地点の北西側に位置する南側斜面突出部を26-02トレンチとし、調査を開始した。表土を剥ぐと、塩井川で削られた花崗岩の岩盤とその上の堆積土との狭間に、小石が敷き詰められていることを確認した。その後、突出部を断ち割る小トレンチで層序を確認したところ、版築盛土であることが判明した。それを受け、その対岸に、同様の構造が認められるかどうか把握するため、26-04トレンチを設定した。

さらに、10月15日より、26-01で検出された青灰色土と水路内の石群との関係を把握するため、26-08トレンチの掘削を開始し、27日より、26-06トレンチで検出していった版築様の盛土層の範囲を把握するため、26-09、11トレンチを順次設定して層序の確認を行った。また、26-04トレンチに隣接する26-10トレンチを設定して、26-02トレンチで検出した盛土遺構の範囲の把握に努めた。

こうした状況のなか、12月3日、専門調査員として、小田富士雄氏（福岡大学名誉教授）を招聘し、池ノ尾門跡調査の方向性に関する指導があった。さらに、11日、古代山城研究会の現地見学会が鞠智城跡において行われ、列状に配された3石（背面石列）について人為的であるとの指摘があった。平成19年に入った1月14日には、出宮徳尚、桑岡実向氏（岡山市教育委員会）を招聘し、集石について可能であれば全面露出する必要があるとの指導を受けた。さらに、2月25日、平成16年度第2回鞠智城跡保存整備検討委員会において現地指導が行われた。

第26次調査では、26-02トレンチで検出された盛土遺構の範囲把握に調査が集中してしまい、26-01トレンチを中心とする集石については次年度に調査を再開することとし、調査を終了した。

2) 平成17年度

第27次調査は、平成17年6月29日から平成18年3月24日までの期間で実施した。池ノ尾門跡の調査については、平成17年6月10日、調査に先立ち行われた平成17年度第1

回鞠智城跡保存整備検討委員会において集石箇所の全面発掘が了承され、昨年度のトレーニングを取り込んだ調査区の設定を行った。

調査区周辺及び灰塚からの北東側斜面部の除草等の作業を実施し、平成17年7月8日より本格的な掘削作業に入った。既設トレーニング以外の箇所においては青灰色土層を検出し、既設トレーニングにおいては小トレーニングにより下層の堆積状況の把握に努めた。

まず、調査区の西側半分に設定した27-01、27-03の掘削を開始し、併せて27-02では、青灰色土上面まで掘削が及んでいたため、小トレーニングにより集石までの深さ及び土砂の堆積状況を確認した。7月22日より27-05トレーニング、27日より27-06トレーニング、29日より27-08トレーニング、8月2日より27-07、27-09トレーニングの掘削をそれぞれ開始した。27-08トレーニングでは切岸状の段地形が認められた。近世の陶磁器片が出土し、後世の開削であることが判明したものの、残存部分にはしまりのある粘質土が認められた。4日に門礎石を現位置から30m程東に移設する作業を実施した。9日より27-04トレーニングの掘削を開始し、17日、27-09トレーニングから丸瓦片が出土した。27日より26-07トレーニングの未掘削部分の掘削も開始した。

このような状況のなか、30日に小田富士雄氏を招聘し、現地指導が行われた。今後の課題として、石壘の前面ラインの把握が必要との指導と、兼ねてからの懸案事項であつた青灰色土層及び26-06トレーニングで見られる版築様の盛土について、出土遺物から中世以降の堆積との判断が下された。このことから、その後の調査は、集石の全面露出により石壘規模の把握を目指していくことになる。

9月1日より、石壘の前面ラインが想定される27-01、02トレーニングにおいて面的な堀り下げを開始した。同時に、26-07トレーニングにおいて後世の盛土層の掘削を開始した。10月4日、27-02トレーニング中央部において145×95cm大の大型石材を検出、7日に、その南側にやや外反しながら続く3石を確認し、前面石列であることが判明した。同日、それを受けて、北側への延長を把握するため27-04トレーニングの掘削を開始した。さらに、12日より27-10トレーニング、13日より27-03トレーニング、18日より27-05トレーニングの掘削をそれぞれ開始した。26-06・07、27-05トレーニングにおいて、集石のレベルが南東方向に

向かって下がっていくことを確認した。21日より、集石の露出を終えた27-02トレーナーから岡化作業を開始した。

12月6日より、通水溝取水口の把握を目的とし、27-07、27-08間にベルトの掘削を開始し、新たに27-11トレーナーとした。その後、9日に取水口の蓋石と、その下に一定の幅で側壁らしき石材を検出した。結果的に、蓋石が前方にずれ、転石に支えられた状況であることが確認されたが、通水溝取水口の発見は鞠智城跡では初めてのことであった。さらに13日、取水口の前面に側壁の石積みが延びていることを確認した。これを受け、14日、西谷正氏（九州大学名誉教授）を招聘し、現地指導が行われ、排水口及び通水溝の内部構造の把握などの必要性が指摘された。15日、取水口前面のものは石積みの側壁をもつ溝であることが判明した。

平成18年に入り、通水溝の排水口及び内部構造の確認のため、27-10トレーナーの掘削を再開し、26-05、27-10間に27-12トレーナー、27-08、27-09間に27-13トレーナーを設定して新たに掘削を開始した。

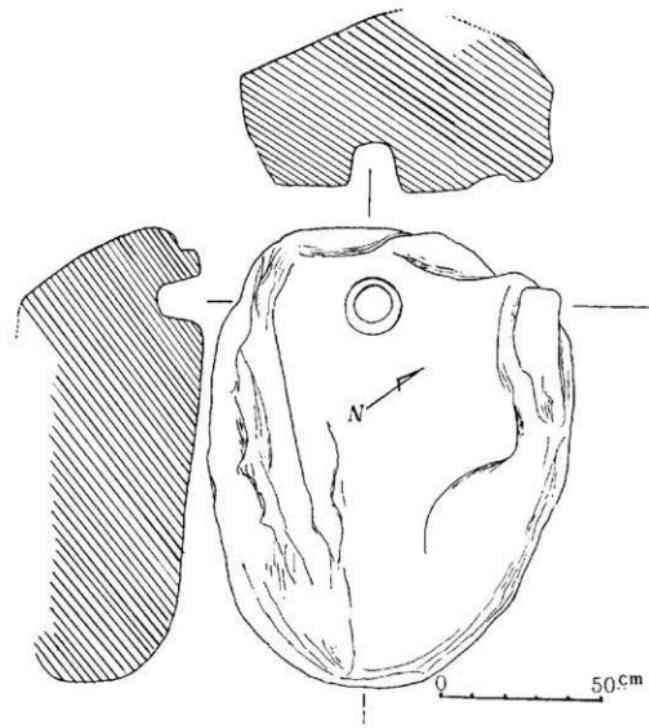
調査が最終局面を迎えた2月14日に小田富士雄氏を再び招聘し、現地指導が行われ、通水溝の内部構造の把握の必要性と、石壘と土壘との関係、石壘高についての指摘があった。さらに、2月18日には、出宮徳尚、乗岡実尚氏から、背面構造及び通水溝の延長についての現地指導が行われた。その後、22日より、背面石列の延長及び石壘高の把握を目的として、27-05トレーナーにおいて一部転石の除去作業を開始するものの、作業が難航したため、新たに27-14トレーナーを設定して掘削したが、未解明のまま調査を終えた。

結果的に、通水溝の排水口及び内部構造、石壘高等検証できず、また岡化作業も完了しなかったため、これらを次年度の課題として第27次調査を終了した。

第3節 池ノ尾門跡について

1 これまでの成果

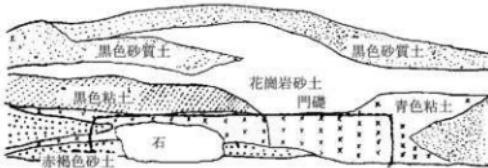
池ノ尾門跡の調査については、昭和42年度の第1次調査で一部掘開を伴う調査を実施している。谷北寄りの北側水路内に門礎石が所在したことから、当初から城門の存在



第3図 池ノ尾門礎石（熊本県教育委員会編 1968）

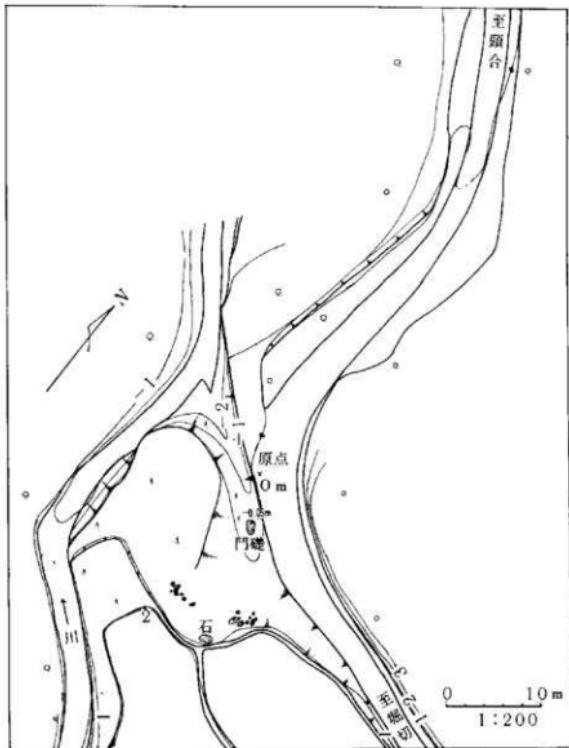
が想定されていた。第1次調査においては、門礎石の原位置の把握及び塊石、切石等の集石における規則性の有無などに主眼が置かれて調査が実施され、短期間ながらも、石垣の存在を想定するまでの成果を挙げている。

当時、門礎石が置かれてあった箇所の掘開を伴う調査では、その層序において塊石を含みながら赤色砂土、青色粘土、花崗岩砂土、灰色砂土、黑色砂土などが乱雑に堆積した状況が確認され、原位置を保っていないことが判明した



第4図 池ノ尾門礎石付近南壁土層略図（熊本県教育委員会 1968）

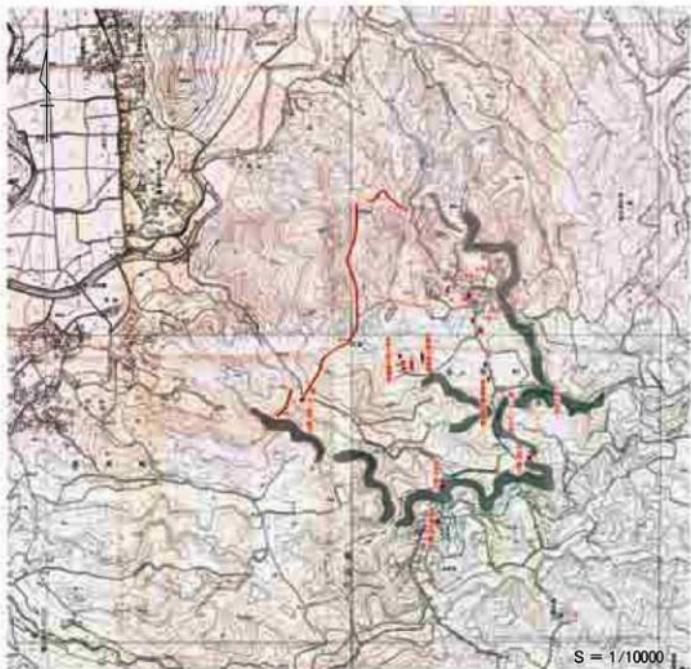
(第4図)。これを受けて、門礎石原位置の推定箇所を、当時の位置から谷を約10m遡った地点に求めている。その根拠として、谷の傾斜変換点であること、畦畔が1m程高くなっていること、その点と西方稜線とを結ぶ線上に遺構と思われる塊石、切石が認められることを挙げている。この原位置と推定される地点の掘開調査では、一定の範囲で塊石、切石が検出され



第5図 池ノ尾門礎石周辺地形図(熊本県教育委員会編 1968)

た。このほか、門礎石の実測と詳細な観察を行い、平面形状は長軸1.43m、短軸1.15mの卵形を呈すること、直径17cm、深さ14cmの軸摺り穴の内面は摩滅して平滑となり、その最深部はやや端部側に寄っていること、軸摺り穴のふちの摩滅の程度も南側の部分の摩滅がつよいこと、底面に鉄錆がのこっており、門扉の軸を受けるための鉄製の受け皿がおかれていたことなどが述べられている(第3図)。

結果的に、塊石、切石の集石については規則的な配列が認められず調査を終えているが、鞠智城跡発掘調査の初期の段階で、石壘の存在を予測した点で高く評価できるものであった。今回の調査も、第1次調査の調査成果に基づき、門礎石の原位置及び石壘



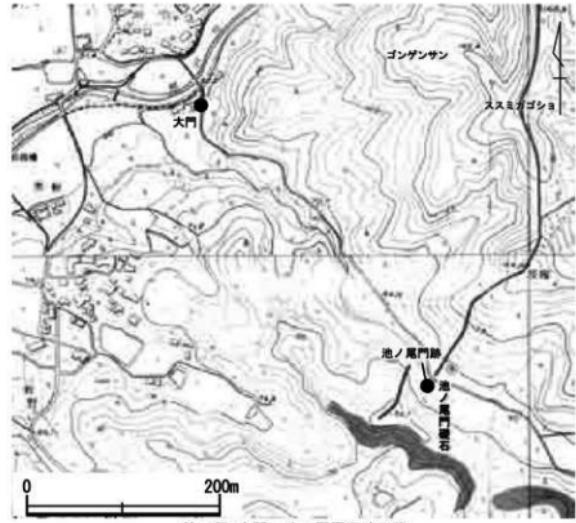
第6図 鞠智城跡周辺地形図（熊本県教育委員会 1983）

の把握を主眼に置いて調査を実施している。

2 立地について

現在、鞠智城跡の城域は、中枢部である米原台地を中心とする周長約3.5kmの範囲を真の城域とする。城域内には北側と南側に大きな谷が所在しており、それらを城内に取り込んだ、いわゆる「包谷式」山城となる。2つの谷のうち、池ノ尾門跡が所在する南側の谷は、馬こかしの石垣、深迫門跡のある城城の東縁近くを起点とし、比較的広い平坦面を形成しながら西方向に延び、池ノ尾門跡付近で最も狭まる。それから北東方向に向きを変えて狭谷を形成しながら、古代の条里地割が残る菊鹿盆地に向かって開口する。開口部の前面には、菊鹿盆地東縁を流れる木野川の支流初田川が南流しており、谷開口部には「大門」という地名が残る。池ノ尾門跡から「大門」までは、直線距離で約600m、比高差約40mとなる（第7図）。

鞠智城跡の城域については、諸説分かれることもあるが、これまでに、周辺の地形から類推して大きくは狭城説と広城説とに分かれる。狭城説は、南を堀切集落の後背にそびえる阿蘇熔結凝灰岩の侵食された崖線とそこから北西方向に延びる低山、西を初田川流域の小盆地、北から東にかけては支流米原川の浸食谷で区画された範囲で、東西幅約1.6km、南北幅約1.3km、総面積120ha. の規模となる。また、南の崖線の中途から北に分岐し、池ノ尾で谷を渡り、米原台地から北に派生する灰塚、涼みヶ



第7図 大門～池ノ尾周辺地形図

御所、佐官どんといった地名が残る低山の尾根筋を通り、北側の谷を渡り、台地の東縁を巡る、周長約3.5kmのラインがある。現在、このラインで区画された範囲を真の城域とするのは先述したとおりであるが、これを内城地区、その外側を外縁地区と呼称している。

鞠智城の防禦を考えた場合、谷開口部から奥まったところに位置する池ノ尾門の立地と周辺の地形的特徴から、官道に直結する「大門」を正門とした、内城地区を内郭、その外側を外郭とする複郭構造との見解も提示されているが、現在のところ、「大門」を含め、外縁地区に主だった遺構は検出されておらず、自然地形をそのまま利用した可能性が高い。鞠智城跡を複郭構造とみた場合、池ノ尾門が内門となる。

これに対する広域説は「大門」付近から初田川を渡り、対面の頭合、木野、立徳と北に延びる低山の尾根をつたい、北から東へは金頭の連山（最大標高211.8m）を経て馬蹄形を呈する範囲となる。最大直径3.6km、周長12kmとあまりに広大で自然地形をそのまま防衛ラインとしたとする見方が一般的である。

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 池ノ尾門跡

1 周辺の環境について

池ノ尾門跡は、門礎石の元位置から推察して、城城南側の谷の底幅約20m程の最狭部のやや南東側に推定されている。標高90m程の谷底には、南東側斜面裾に塙井川、北側にも水路があり、谷の最狭部で塙井川と合流する。門礎石は当初、その合流地点よりやや上った北側水路内にあった。合流地点にも、多数の礎、石が散在しており、中には面調整を施したような石材も認められるが、規則的な配列は確認できない状況である。また、南東方向に突出する北側斜面裾にはコンクリート舗装の市道下本分～堀切線が通る。

第1次調査において多数の塊石、切石が検出されたのは、塙井川と北側水路の合流地点から南東方向に約20mさかのぼった平坦面においてである。その平坦面には、調査前から、数点の石の露出が認められた。以前、畑として利用されており、南西側に比高差1.5m程の段があり、南東側にも低い段が認められた。合流地点より北側の塙井川の東岸にも細長い平坦面が所在するが、こちらは以前、水田として利用されていた。

池ノ尾門跡の南西側は急峻で、米原台地の東端から西方へ派生する低山の痩せ尾根へと至る。その南面は、阿蘇熔結凝灰岩の急峻な崖地形となっており、天然の要害と言った様相を呈する。この尾根が城城南の外郭ラインとなるが、土壌的景観を色濃く残していることから「南側上星線」と呼称している。この南側上星線については、平成15年度の第25次調査の際、池ノ尾門跡の南西方の尾根突出部において発掘調査を実施しており、その周縁から版築土塁が検出された。山の主尾根はそこから北東方向に向きを変え、初田川流域の小盆地へと延びるが、突出部の北東側は堀切状の谷が挟まり、地形的断絶が認められる。このことから、この突出部が南側上星線の西隅との想定をした。この西隅から分岐して北東方向へ延びる支尾根が認められ、池ノ尾門跡よりやや北側へ下った地点へと延びている。その支尾根東斜面は棚状の段地形となっており、池ノ尾門跡の南斜面は先述したとおりかなり急峻な傾斜となっているが、ここにも棚状の平坦面

が尾根近くに認められる。現在のところ、南側土壠線西隅から池ノ尾門跡に至る外郭線については、遺構らしき痕跡は認められていない。

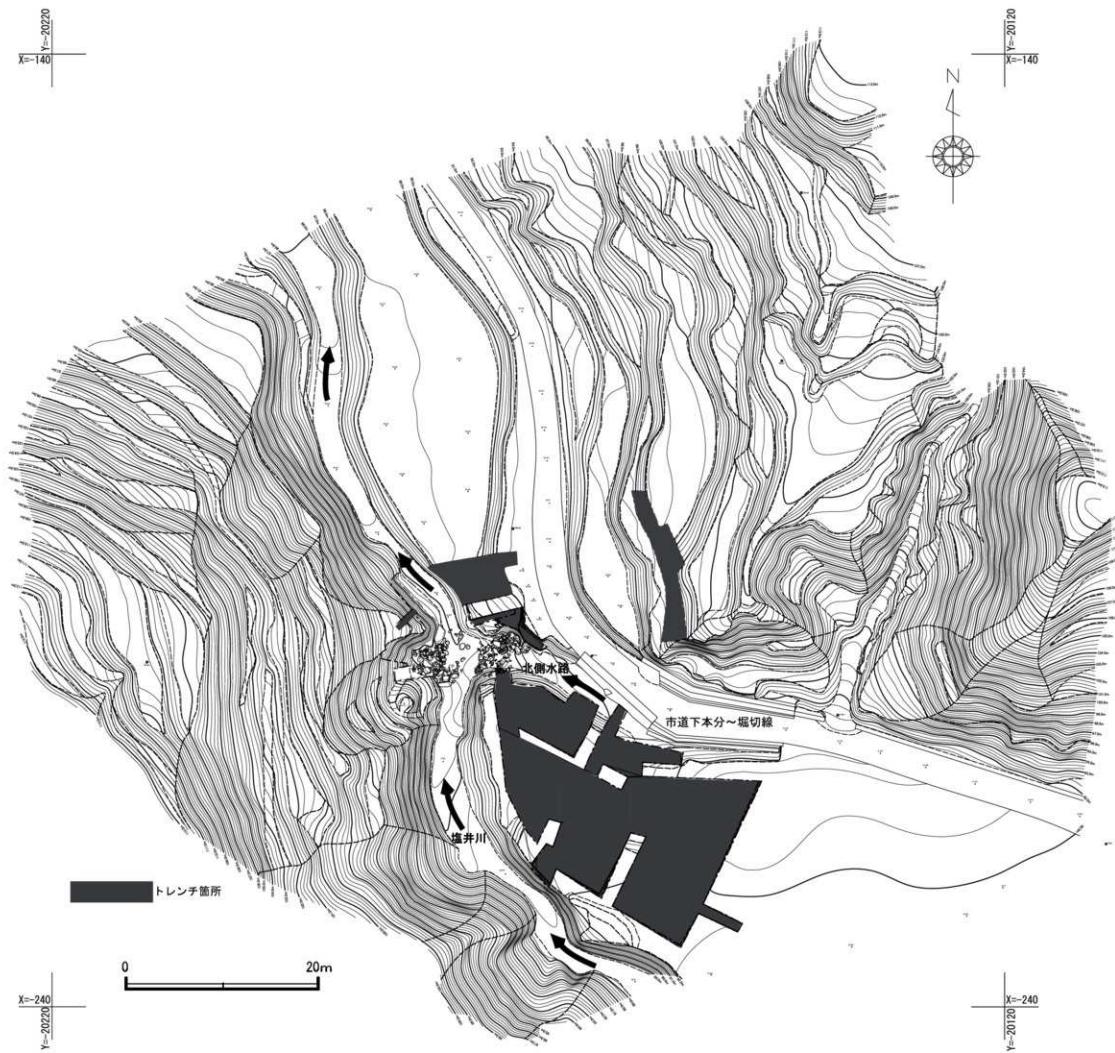
池ノ尾門跡の北東側は、標高165mの灰塚頂部から南西方向に派生する尾根が直前まで延びる。現在、土壠の様相を呈する残丘状の高まりが市道直前まで延びており、古くから土壠として認識してきた。現在のところ、その高まりを除くと、灰塚頂部へ至る外郭線については、尾根筋が棚状の段地形となっていることから確証は得られていない。尾根の西斜面にも棚状の段地形が認められ、東側には深い侵食谷が形成されている。

2 遺構の検出状況について

池ノ尾門跡周辺は、谷筋にあたるという立地上、交通に適していること、南側の谷部全体の谷水が集まること、また、東側に耕作等に適した比較的広い平坦面が所在することなどの理由から、後世に大規模な開削あるいは自然災害が及んだ地域と判断される。調査の結果、石壠と土壠を検出したが、各遺構の大部分は崩壊しており、さらに当時の地形まで大幅に改変されていることが判明した。

まず、石壠については、段地形の下段部分において基底部の石列近くまで削平を受けしており、石壠北東側においても北側水路により欠損している状況が認められた。また、塩井川についても、花崗岩の岩盤を一定幅に掘りこんでいる状況が認められることから、自然河川というよりも、以前、塩井川の上流にため池があったという話から、それまでの自然流路とは関係なく付設された人工河川であるものと思える。このことから、南西側においても、かなりの部分欠損しているようである。また、石壠前面から約10m北西の地点で検出された土壠についても、塩井川の左岸となり、南側斜面に僅かに残存する程度で、その延長すら追えない状況にあった。

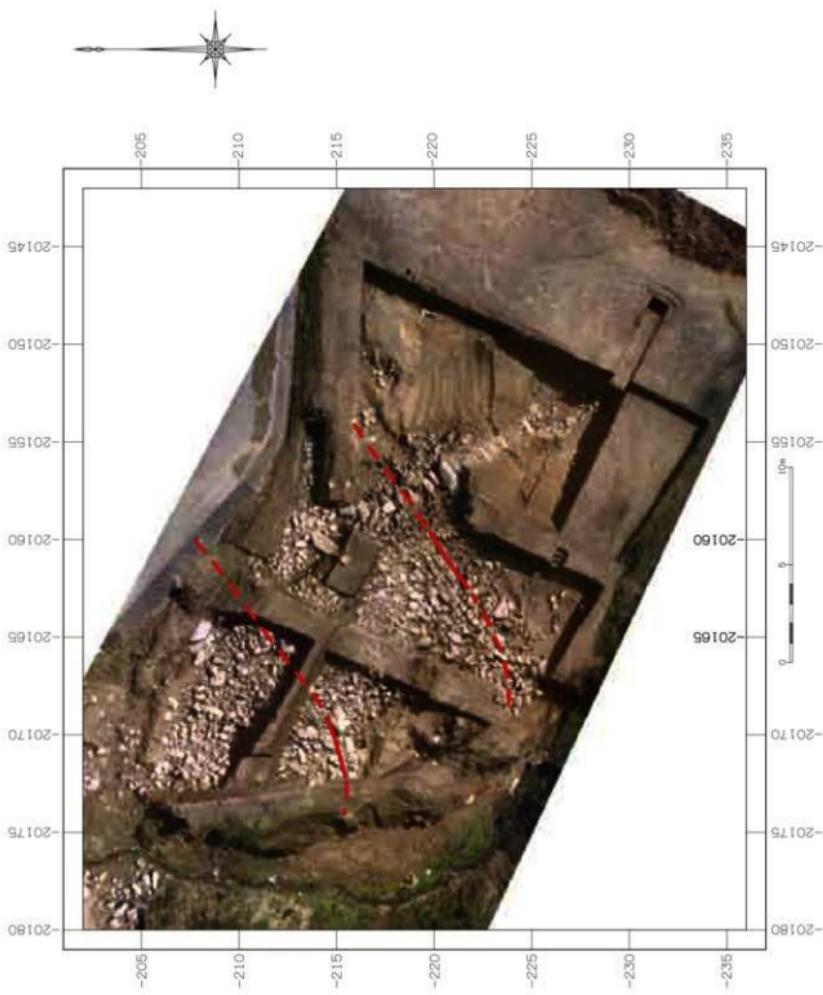
また、門礎石の原位置についても、今回の調査結果で最も可能性が生じた北東側斜面縦に、コンクリート舗装の道路が通っていることから、これ以上の究明はできない状況にあった。(第9図)



第8図 池ノ尾門跡周辺地形図



第9図 池ノ尾門跡遺構配置図



第10図 石塚

3 石壠

1) 全体規模

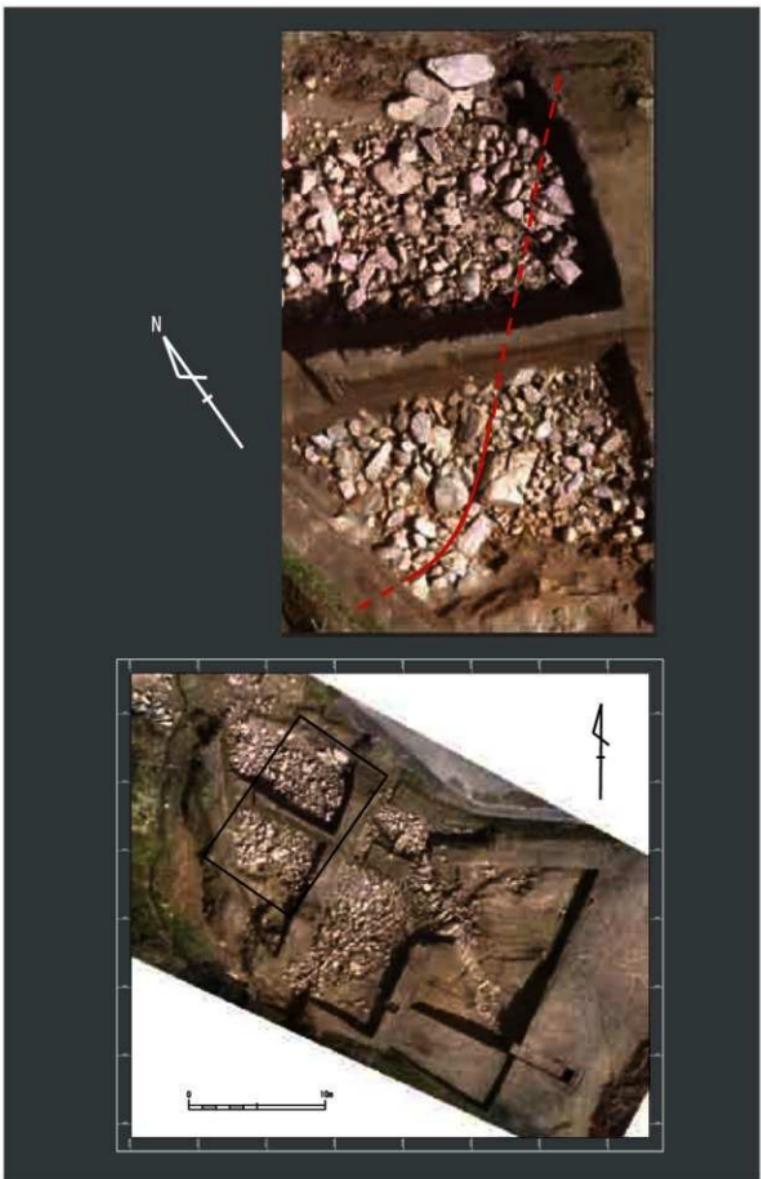
石壠は谷に直交する形で北東から南西に向かって延びる。残念ながら、先述のとおり、南西側に塩井川、北東側を水路により寸断され、さらにその北東側に市道が通り、総延長は不明であるが、少なくとも、塩井川北東岸から北側水路南西岸までの距離、約 12 m はあったものといえる。ただし、その残存部においても、後世の開削あるいは自然崩落によりそのほとんどは欠損した状況にあり、石壠の基底部と通水溝の一部の検出にとどまる。石壠の基底部については、石壠前面と背面にそれぞれ石列（前面石列・背面石列）を検出しておらず、基底幅については、両石列の外面の延長線間の距離で約 9.6 m を測る。

石壠の平面形状は前面石列の南西側がやや西側に緩やかにカーブを描くことから、城内側となる南東に向かい弓なりの形状になるものと思われる。石壠高及びその構造など、基底部より上の状況は明らかではないが、石壠内外に面調整を施した石材が多数散在している状況から数段の石積みが想定される。（第 10 図）

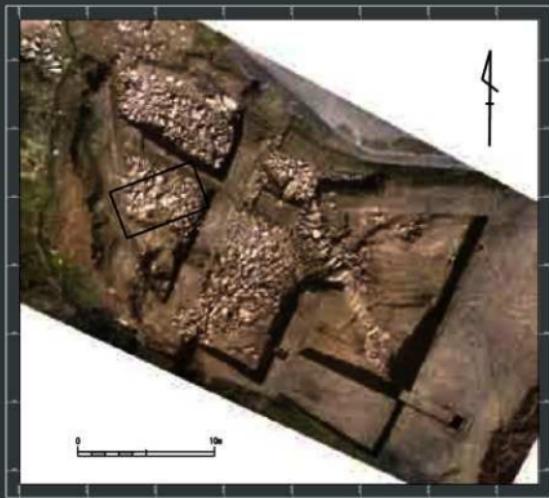
2) 石壠前面

石壠前面の中央付近よりやや南西側に、約 3.5 m 分の前面石列を検出した。原位置を保つものとして確実なのは 4 石で、南西側はゆるやかに弧を描きながら西方向に延びている。（第 12 図）

各構成石材については、形状及び大きさにおいて様々な石材を使用している。石列のうち北東端の石材は、最大長約 140cm、幅 95cm の平面台形の大型石材で、約 110cm の短辺を外側に向ける。その西隣は、長軸 90cm、短軸 40cm 大の平面長方形の石材を横置きにする。これは、後述する背面石列を構成する石材と似た形状である。次に、長軸 65cm、短軸 40cm の石材で、石壠前面側にやや湾曲した割面を持つ。次に、約 25 × 20cm 大と約 40 × 20cm 大の石が縦列で認められるが、この 2 石が構成石材かどうかは判然としない。その 2 石を挟み、長軸 70cm、短軸 40cm の不定形の石材となるが、これも石壠前面側に割面を持つ。石材の材質については、北東側から 2 番目の石材のみ花崗岩で、その他は安山岩系の石材を使用する。北東端から 2 番目の石材の後背に小トレンチを設定して石材



第11図 石塁前面 (S=1/100)



第 12 図 前面石列 (S=1/50)

の下面の土層を確認したところ、灰青色系の地山直上に置かれていることが判明した。このことから、いずれも石壘基底部を構成する石材と判断できる。

これら石材の配列は、北東端の石材とその西脇の石材間に約20cmの隙間が認められるものの、その西の石材との間には隙間がない状況である。各石材上面の高さは、北東端の石材のみ突出した状況で、その他はほぼ揃う。北東端の石材のみ石積み2段分の高さになるものと思われる。各石材の石壘前面側は不揃いで凹凸が認められるが、西側2石については割面で面を合わせようという意識が見て取れる。

石壘前面には、石壘の構成石材のような、面調整を施した石の転石が認められ、その下に、鉄分の付着した小石が認められる。このことから、前面に敷石があった可能性も考えられる。残念ながら、前面石列から北東側への延長については、今回の調査では解明できていない。(第11図)

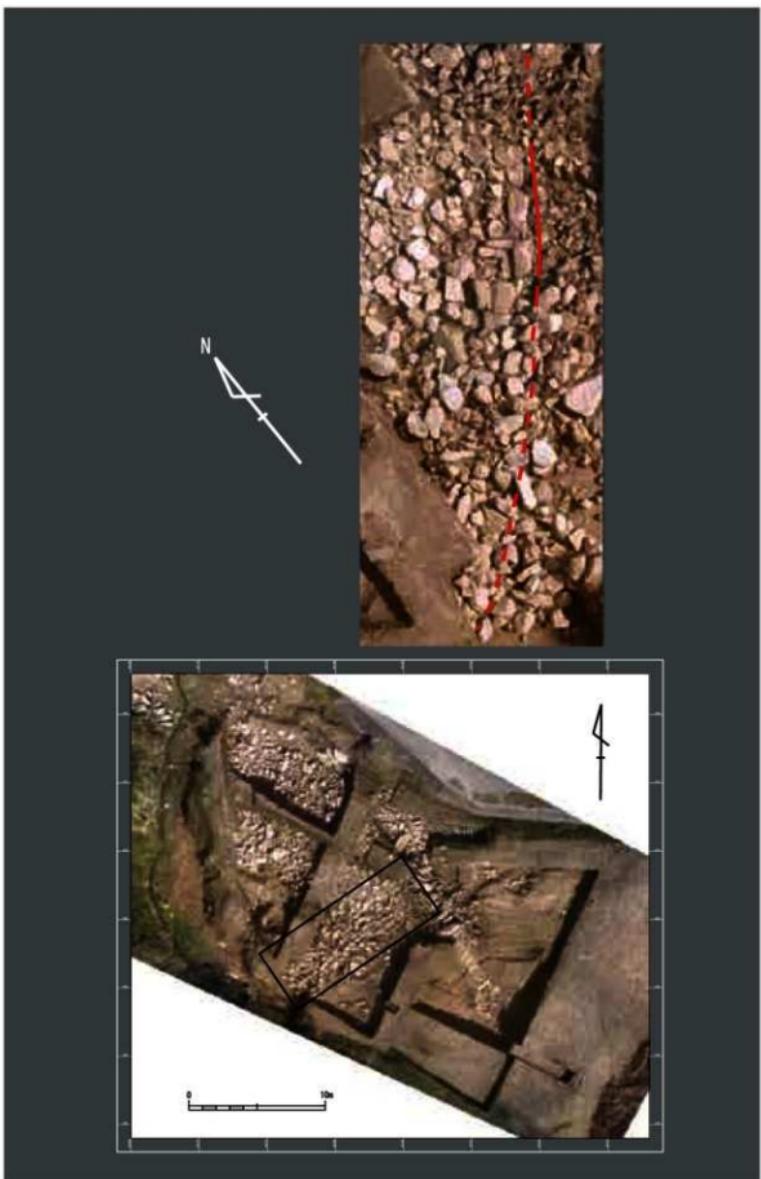
3) 石壘背面

石壘背面の中央付近の地点に、約2.8m分の背面石列を検出した。いずれも材質は花崗岩で、形状のよく似た3石で構成され、直線状に延びる。(第14図)

各構成石材については、北東側から、約90×40cm大、約100×40cm大、約75×40cm大の平面長方形の石材を短辺を合わせた形で縦置きに並べる。この石列は、南西端の石材から約2.0m程の後背に地山の平坦面が認められ、石材底面のレベルとさほど相違ないことから、基底部を構成する石材とみてほぼ間違いない。

石材の配列については、北東端の石材と次の石材との間に数cm、その次の石材との間に約15cmの隙間が認められる。3石の上面高はほぼ揃えられた状況にあるが、石壘背面側は多少の凹凸があり、不揃いとなる。それに比べ、石壘内部のほうの面に多少揃えているような意識が見て取れるのが興味深い。

また、背面石列の石壘内部側に、10～15cm程度の間隔を空けて平行する石列を検出した。現状で、約30×25cm大～約40×30cm大の4石で構成されるが、各石材の面を揃えるようなことをせず、無作為に配列しているような状況が見て取れる。このほか、背面石列の南西端の石材の縁から北西に向けて直交する石列も検出した。南東から、約



第 13 図 石壙背面 ($S=1/100$)



第 14 図 背面石列 (S=1/50)

75 × 60cm 大、約 70 × 35cm 大、約 50 × 45cm 大の石材を横置きに並べた配列となる。材質は、南東から 2 石は安山岩系、3 石目は花崗岩となる。南東から 2 石は隣接して置かれた状況にあるが、3 石目は 20cm 程度の間隔が空く。2 石目と 3 石目の間の石材が抜けているか、あるいは 3 石目が原位置を保っていない可能性が考えられる。これら石列の性格については、現段階では確証を得ないが、石壘の強度を保つための間仕切り的な造作であった可能性も考えられる。

背面石列から南西側への延長については、多数の転石に覆われ、原位置を保つ石材を見つけ出すのに困難な状況にある。ただ、塩井川右岸の法面を精査したところ、石列の直線上からやや北西側の地点の断面上に、石積みらしき石材が 2 石程認められた。このことから、やや弧を描きながら、西方向に延びるラインが想定される。また、調査区南西端近くの最上部石材の上面とその南東側の地山との比高差は約 1.0m となり、背面石列上面からの比高差は約 1.5m を測る。

背面石列から北東側については、石列北東端まで後述する通水溝の埋没のための溝があり、140cm 程で通水溝の側壁構成材の端部に当る。北東側延長線上の約 80 × 60cm 大の通水溝蓋石は既に原位置を保っておらず、やや北東側にずれている。この蓋石の南東端から 120cm 程で北側水路へと至る。(第 13 図)

4) 石壘内部

石壘の内部については、小さいもので数 cm、大きいもので 30 ~ 40cm 大の石を裏込めした状況が認められる。一部に、石に混じり土砂も混入しているが、後世の流入土であるかどうか判然としない。なぜなら、一部に地山が露出している部分もあり、集石状況に粗密が認められることから、基底面近くまで欠損した状況にあると判断されるからである。

前面石列と背面石列との比高差は、その上面において 30 ~ 40cm 程度となり、前面石列の北東端の大型石材の上面とはほぼ同レベルになるものと思われる。比較的勾配の緩やかなことから、石壘構築の際、ほぼ平坦に地山整形されたものといえる。

石壘の北東側、南西側斜面への取り付け部については、北側水路あるいは塩井川による寸断により明確には言及できない状況にあるが、そのうち南西側については、塩井川

北東岸まで花崗岩の岩盤が突出した状況で延びており、それを取り込みながら石壠を築いていた状況が見て取れる。

5) 通水溝

通水溝は、石壠に直交するような形で、南東から北西にかけて検出した。通水溝の取水口は谷の中央付近に設けられているが、そこから北東側の尾根裾寄りに延びている。全長については、北西側を北側水路により断ち切られた状況にあり、排水口も検出できていないため不明であるが、通水溝の取水口が背面石列の延長線上から約7.5m南東側の地点に設けられており、石壠の基底幅約9.6mを考えた場合、少なくとも16m以上あったものと言える。

検出長は、蓋石が既に原位置を保っていないものも含めて、取水口から北側水路南岸までの区間、約10mを測る。蓋石については、取水口の蓋石はやや前のめりとなり前方に落ち込んでいたが、それに続く7石の蓋石、約4.1m分が原位置を保つ。それより北西側の蓋石は原位置を保っていない。(第15図)

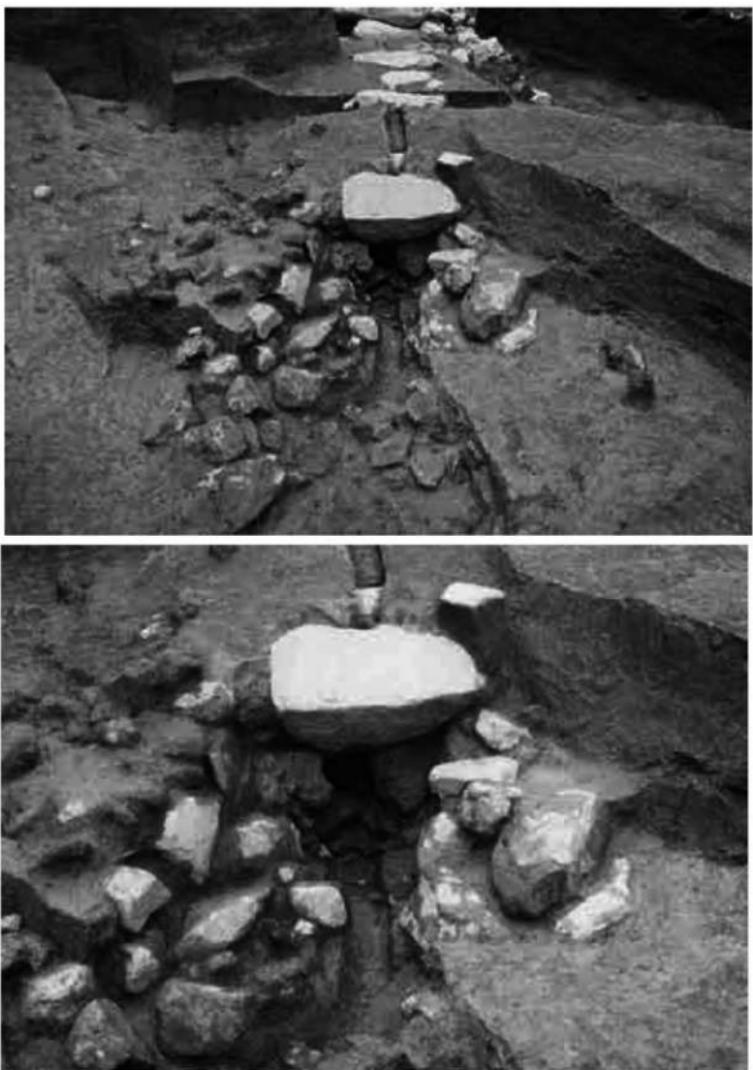
通水溝の断面構造については、取水口付近の奥を手触りにより確認したところ、側壁は、小口部を内面に向けて平滑にした数段の石積みにより構成されるものと思われ、内法幅約60cmを測る(第16図)。蓋石には約90~100cm×25~40cm大の花崗岩あるいは安山岩系石材を使用し、前後隙間なく横架したものと思われる。特に、取水口の蓋石については、露出部ということもあり、石材に花崗岩を使用し、蓋石前面及び上面を平滑に仕上げている。内法の深さは、底石が明確に押さえられていないため正確な数値を与えることができないが、現況で、少なくとも50cm以上はあったものと思われる。蓋石上面については、取水口のものを除き、揃えるような意識は働いていない。

通水溝の埋設にあたっては、約4.0m幅の溝が掘られており、側壁との間に10~20cm大の石を裏込めした状況が見て取れる。蓋石の上部に灰青色の粘質土を貼ったような状況が一部に認められており、本来、取水口を除く蓋石は、石壠背面までの区間、露出していないかったものと考えられる。

北側水路内の通水溝の延長線上には、通水溝の部材が散在している状況が見て取れる



第 15 図 通水溝 ($S=1/150$)



第16図 取水口

が、現段階では、原位置を保つ底石は認められない。ただ、散在する石材の下に、最大10cm程度の小石を敷き詰めた状況が一定幅で認められ、幅4.0mの埋設溝の底部に敷かれたものと考えられる。

6) 導水溝

取水口の前面に、南東方向から延びてくる導水のための溝を約3.6m分検出した。底幅1.0～1.2m、深さ40cm以上の断面逆台形を呈する溝で、側壁を石積みとしている。現況では、2段程度の石積みが認められる。ただ、取水口に向けて、北東壁が直線状に延びるのに対して南西壁は内傾しながら狭まり、取水口蓋石の現位置から20cm程のところで幅が通水溝と同幅の約60cmとなる。南西壁の高さも徐々に高まる傾向にあり、取水口付近で約70cm程度となり、3段の石積みが認められる。(第17図)

7) 小結

現地形においては、北東側の尾根裾から塩井川南西岸まで約30mの谷底を形成しているが、調査の結果、塩井川が花崗岩地山を断ち切った人工河川であり、谷底は北東岸まで狭まることが把握され、石壘は約20mの谷底に築かれていたことが判明した。北東側尾根裾から直線で約17m南西に位置する前面石列北東端の大型石材から西方向に向きをかえ、弧を描きながら南西斜面へと延びており、大型石材の北東側については北東側尾根の延長方向からほぼ直線状に延びることが予想される。このことから、排水口については、北側水路内の調査の必要上掘り残したベルト下になるものと思われる。

また、本来の谷の中央は、南東側はほぼ通水溝と重なっていたものと考えられ、北側水路から市道西際を通り、北側平坦面へと抜けることが予想される。調査の結果、通水溝については、1本しか設置されなかったものと判断されるが、東側に控える広大な谷からの谷水が集中する地点でありながら通水溝の規模があまりに小さい。このことから、その南東側に調整池のような施設が設置され、水量を調整していた可能性が高い。

今回の調査の主目的であった門の原位置については、通水溝の位置あるいは北側水路内の門礎石の元位置から、おそらく、石壘幅内の市道の真下にくるものと思われる。通水溝より南西側には、そのような痕跡は認められなかった。



第 17 図 取水口～導水溝 ($S=1/40$)

4 土壘

1) 全体規模

土壘は、石列の前面石列南西端から約20m北北西に向かった塩井川西岸に位置する。その大部分は、塩井川で削平された状況にあり、全体規模の把握は極めて困難な状況といえる。また、土壘南側の抉れ部についても、比較的新しい土砂が堆積しており、当時の造作か、後世の開削かは判断できない状況にある。ただ、塩井川の流路内には比較的石が少なく、抉れ部に多くの石材が散在している状況は、少なくとも、塩井川の造成以前には抉り部があったことを物語る。

残存形状は東に突出する平面3角形を呈し、南東辺で約5.3m、北東辺で約4.7mを測る。高さは基底面から残存高2.4mとなる。土壘の勾配については、延長方向が判断できないため不明と言わざるを得ない。(第18図)

2) 構造

土壘の延長が把握されていないことから、残存部が谷を横断する夾築式の土壘の斜面取り付き部となるのか、あるいは、西斜面に依拠する内托式の土壘となるのかは判然としないが、西側で西側斜面に依拠する内托構造となることは確かである。

地山を鉤状に削り平坦面を造り出し、その上に礫・石を敷き詰め、その上に盛土する構造で、切土斜面は約30～35°と比較的緩やかな勾配となり、途中、2ないし3段の小段を設けている。平坦部は南西辺で約2.2m長、北東辺で約3.6m長が残存しており、ほぼ水平ではあるが、平坦面奥がやや下がり気味となる(第19図)。

盛土は、基底面から30～50cm上までは、小さいもので数cmから、大きいもので約25×40cm大の礫、石が敷き詰められた状況が認められる。石材はまさ土中に含まれるような石材を主として使っており、一部に花崗岩も認められる。現況の露出部では、礫、石に混じり黄褐色の土砂も混入するが、隙間なく敷き詰められていたものと思われる。その上面から断ち割り部で約1.9m高の盛土となる。3～13cm厚の層が23層確認できたが、基本的には、すべての層がまさ土をベースとしたしまりの強い黄褐色の土砂で構成され、各層の下面がやや柔らかくなっていることから識別した(第20図)。各層は盛

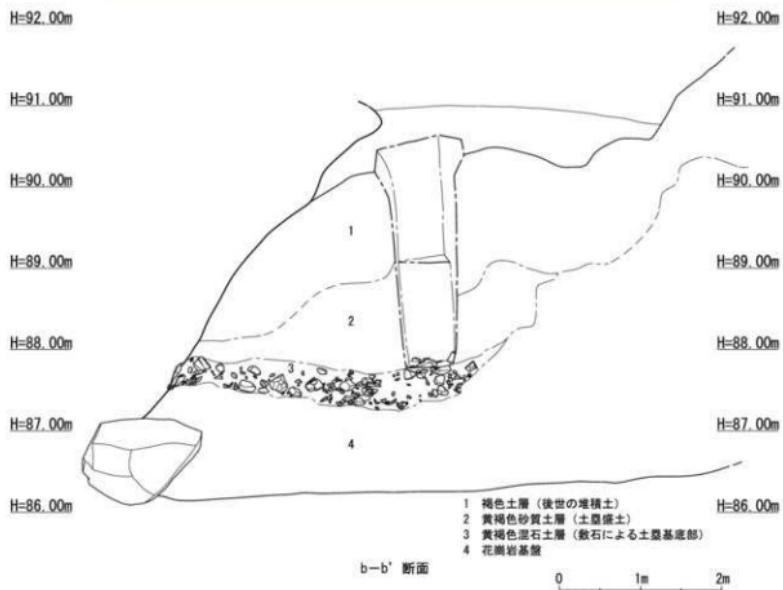
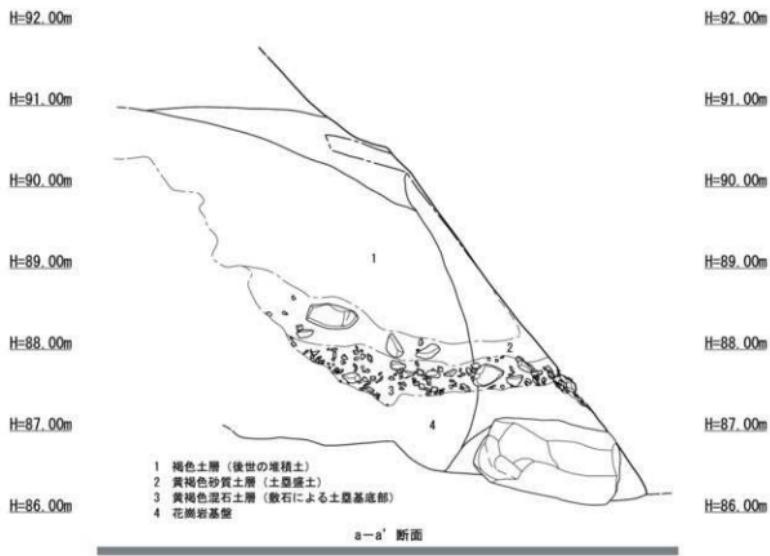
上作業の行程上生じたもので、版築によるものと判断される。

3) 小結

土壠の構造のうち、基底面に礫・石を敷き詰めた状況は、尾根筋に築かれた南側土壠



第18図 土壠全体図



第19図 土壌見通し断面

H=91.00m

H=91.00m

H=90.00m

H=90.00m

H=89.00m

H=89.00m

H=88.00m

H=88.00m



第20図 土壘断ち割り断面

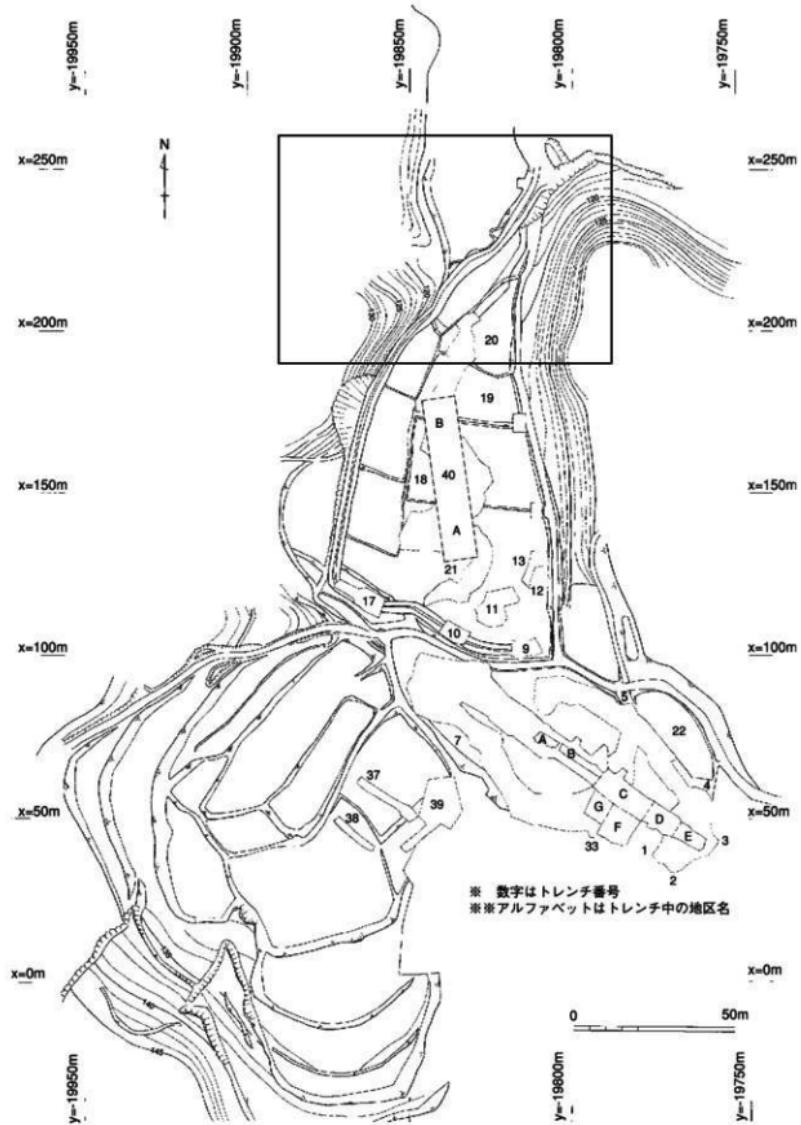
や西側土壘、浅谷に築かれた深迫土壘には見られない造作である。石を敷き詰める行為は、石垣と同様、通水性を良くするためのもので、池ノ尾という谷水が集中するという立地的特徴から採用されたものと判断される。

第2節 貯水池跡の調査

1 堀堤推定部について

貯水池跡は、平成9年度、長者原地区の整備で北側谷部に調整池の造成計画が立てられ、確認調査で水成粘土層が検出されたことから、明らかとなった遺構である。この第19次調査では、貯水池跡の範囲確認も行われ、5,300 m²の規模をもつことが判明した。木簡や建築材等の重要な遺物が見つかることから、その後継続して重点的に発掘調査を実施してきており、これまでに、貯木場や水汲み場、小堀堤などが検出され、池の用途やその構造の解明が進んでいる。

今回、対象となる堀堤推定部については、貯水池跡の池尻部分に当たり、池頭との比



第21図 堤防推定部位置図

高差が10m前後あることから、大堰堤の存在が想定されていた箇所である（第21図）。その後、池内に小堰堤を設けて水量を調整するといった貯水構造が明らかとなり、大規模な堰堤は必要ないとの見解が得られている。

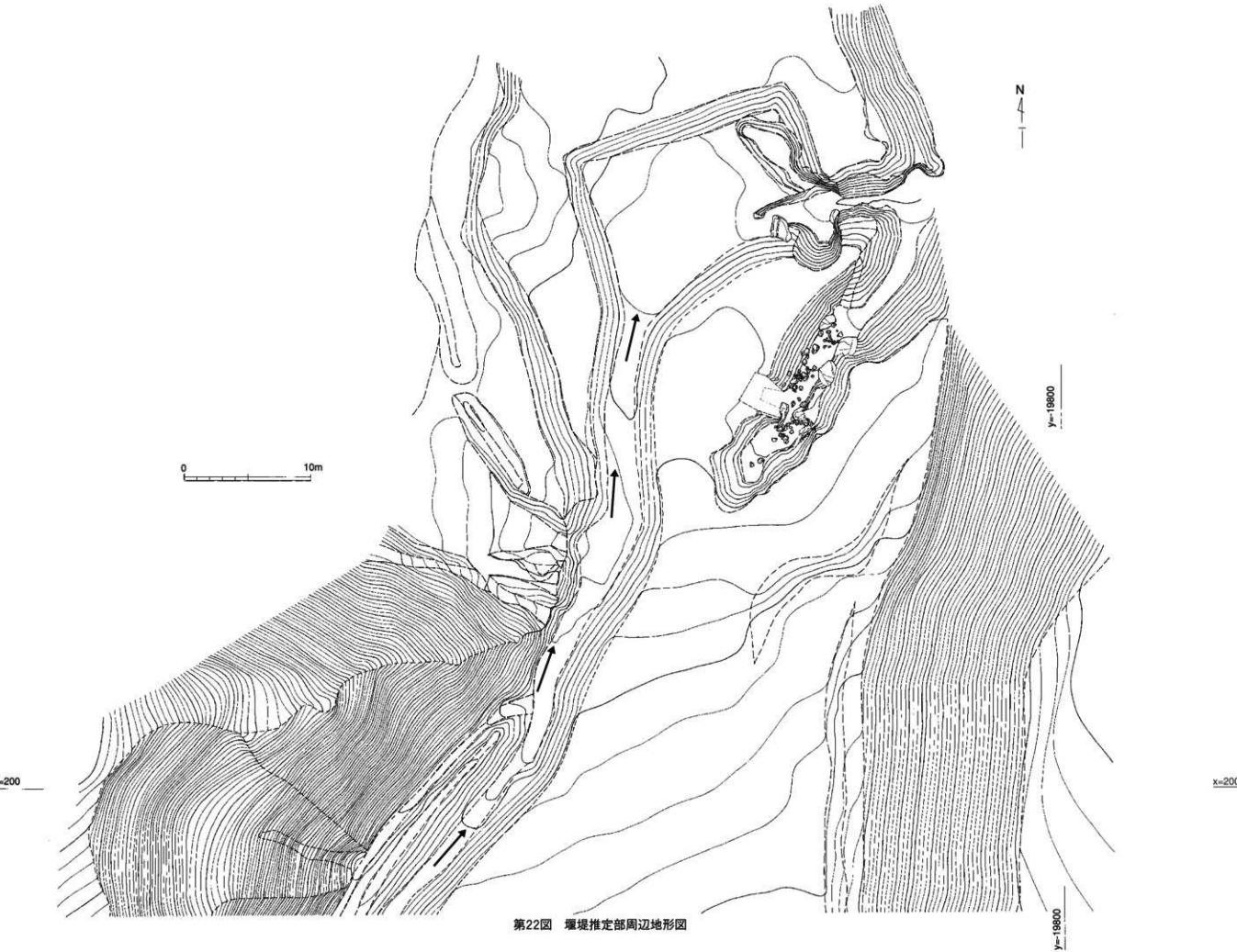
そのようななか、平成11年度に貯水池跡の北に調整池の造成が計画され、それに至る用路の付設が検討されるなか、当時の水路部分に多数の石が散在している状況が確認された。一部に加工を伴うような石材も確認されたことから排水口の存在が想定され、結局、用路としての造成が中止され、西側斜面裾に新たに水路を開削することとなった。

2 集石の状況

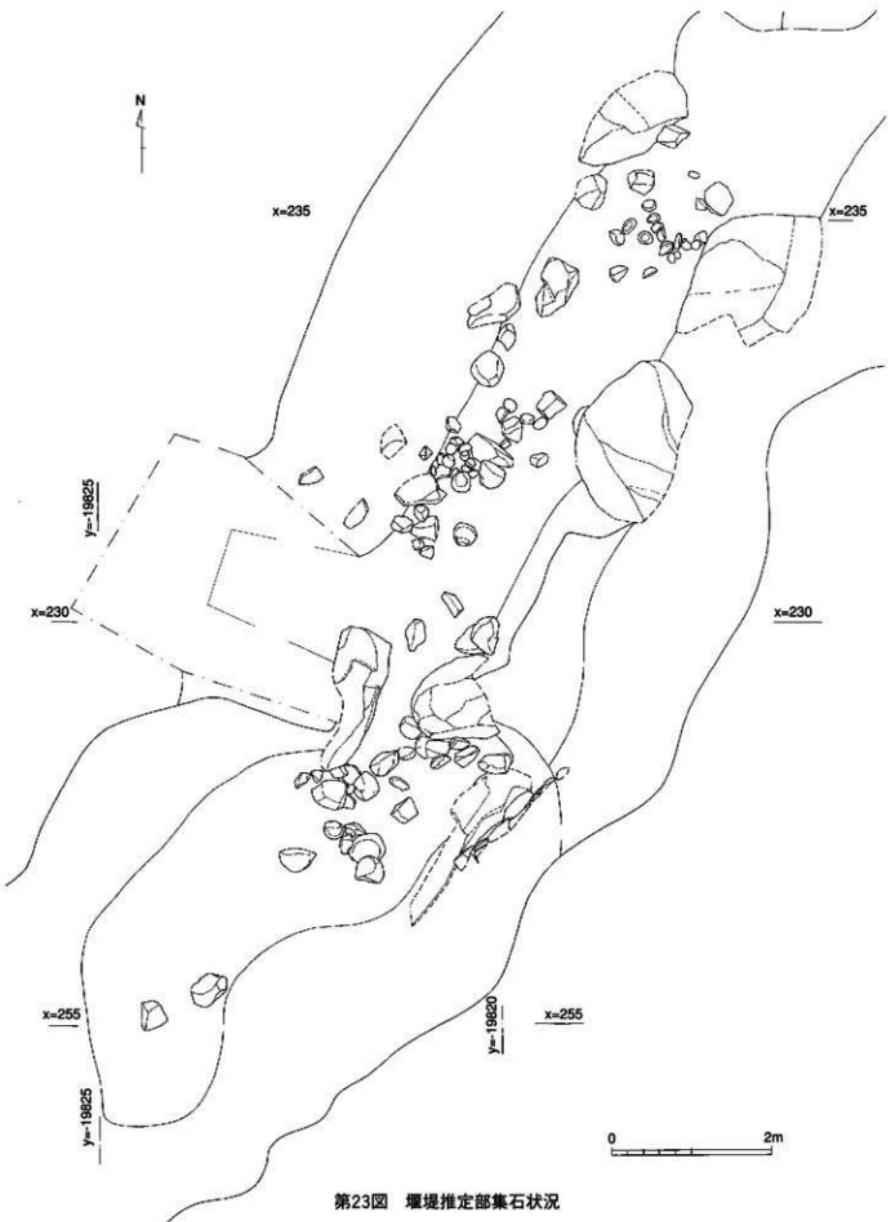
現況における谷幅は約30m程で、南から延びてくる谷の最も狭まる地点に堰堤推定部は位置する。東斜面からの距離は約11mで、やや東に寄るが、新水路法面の土層を観察したところ、南北方向から尾根が水路対岸までせり出すことが判明している。谷の東斜面頂部には、岩クラという大岩が露出している地点があり、石材の多い地域である。（第22図）

現況では、旧水路内には、小さいもので20cm大の石から、大きいもので2m以上の大岩が認められる。水路東岸の一部に20～30cm大の石材を積んだ数段の石積みが認められるが、これは後世の護岸の可能性が高い。水路の底縁に合わせてやや段をつけた石材が以前認められたが、その後、堆積した土砂で埋まったものと思われ、測量時には確認できなかった。（第23図）

いずれにしろ、多数の転石から、石積みの構築物があつてもおかしくない様相を呈しており、今後の調査で明らかにしたい。



第22図 堤推定部周辺地形図



第23図 堤推定部集石状況

第III章 総括

第26・27次調査では、第1次調査でその遮蔽構造として石垣が想定されて以来、その存否が未解明であった池ノ尾門跡の発掘調査を実施し、通水溝を伴う石垣を検出した。自然崩壊や後世の開削等により大部分欠損した状況であったが、その平面規模を把握することができ、また、門礎石の原位置についても、その場所が推定できるなど画期的な成果を挙げている。以下に、その成果の総括と外郭構造における今後の課題について記す。

第1節 池ノ尾周辺の外郭構造について

1 石垣について

池ノ尾門跡で検出した石垣は、城域の南側谷部の最も狭まる地点に位置する。門礎石の原位置、いわゆる門口は現市道と重複していると判断でき、検出した石垣は門の南西側を遮蔽するための構造物となる。

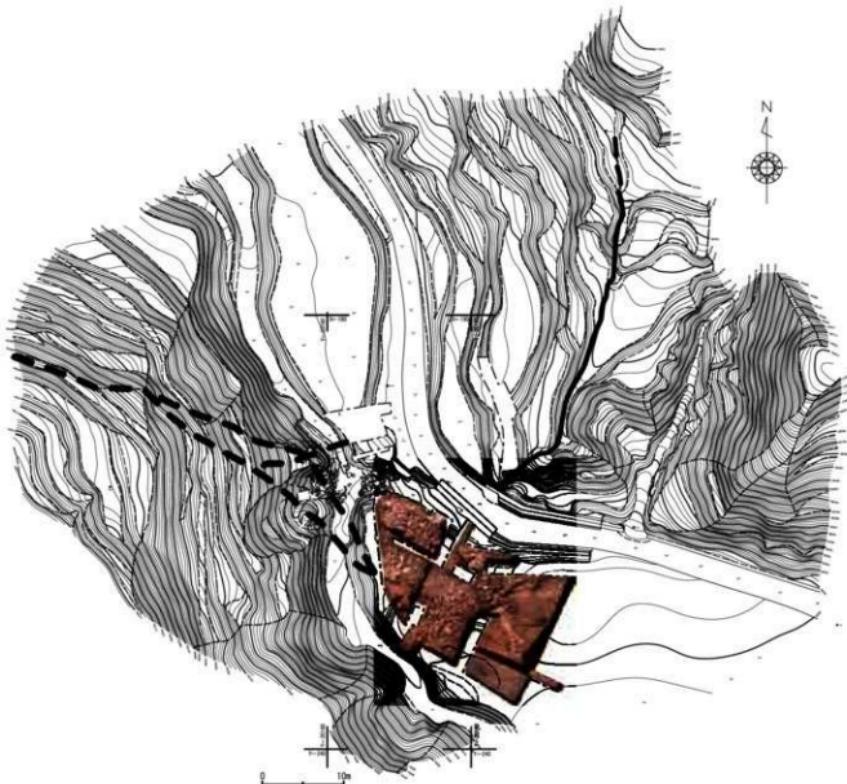
石垣の規模については、検出長は約12mとなる。現在、谷の底幅約30mを測るが、後世の開削となる塩井川を除く20m程の谷幅に構築されていることが判明した。石垣の基底幅は約9.6mとなり、平面形状は内に向かってやや弓なりとなる。

石垣の上部構造については、1.5m以上の石垣が推定されるが、周辺に散在する転石からもおおよその復元は可能である。鞠智城跡の土壘高については、これまでのところ、約3.6mを下限とする高さが推定されている。約3.6m高まで石積みとすることも考えられるが、転石の個数からの復元是不可能で、強度的な限界値まで石積みとし、その上を盛土で構築した可能性が高い。

また、通水溝取水口から背面石列まで約7.5mの区間においては粘土層によって覆われていたことが判明している。背面石列上面との比高差40cm程上に通水溝取水口底部があることから、水の浸透を防ぐためにも、石垣基底部の内側に盛土によるテラスが存在した可能性が高い。

鞠智城跡の門跡については、現在、深迫、堀切、池ノ尾地区においてその場所が比定されている。深迫門跡については平成6年度に、堀切門跡については平成10～13年度にかけて調査を実施し、門礎石の原位置については、堀切門跡のみ門の支柱穴を検出し、その場所を比定するまでの成果を挙げている。

このようななか、池ノ尾門跡の調査の結果、門周辺の遮蔽構造については、それが立地する地形的特徴から各々違った形で遮蔽施設を構築していることが判明した。浅谷の谷頭近くに位置する深迫門跡においては版築土壁により谷を遮蔽し、周囲が崖地となる



第24図 池ノ尾門跡周辺における外郭線の推定

堀切門跡では堀切状の通路の脇に切・盛土を併用した2段構造の土壘を築いたのに対して、池ノ尾門跡では石垣で谷を遮蔽する。これは、池ノ尾の場合、谷の最も狭まる地点に位置するという立地上、城内の広大な谷部の水が集まるということに起因しており、崩壊を防ぐため透水性のある石垣が採用されたものと判断できる。

2 外郭線について

池ノ尾周辺の外郭線は、北東側については、市道の北東法面に所在する土壘状の高まりからおおよそその尾根筋を通り灰塚へと抜けるラインが想定されるが、南西側については、それが面する南側斜面上においてそれらしき痕跡は認められない。この西側への外郭線の想定ラインは、石垣の北側で検出された土壘との関係のもとを考える必要がある。

土壘は塩井川で分断され、その延長が未解明のまま調査を終えているが、3案が想定される。第1案は、土壘が石垣から伸びる外郭線を形成するというものである。この場合、石垣からほぼ直角にふた位置に土壘があること、土壘の現存高が石垣の標高より約2.0m程下回ることから、外郭線は北側に直角に屈曲し、やや標高を下げながら土壘に取り付くことになる。第2案は、池ノ尾の遮蔽構造として土壘と石垣の複郭構造であったものである。第3案は、石垣と土壘の構築時期が異なるというものである。(第24図)

現在のところ、いずれの案も肯定できない状況にあり、南側斜面部の今後の調査成果と併せて考えていく必要がある。

第2節 鞠智城跡における外郭構造の今後の課題

鞠智城跡における外郭構造については、今回の調査で、深迫、堀切、池ノ尾の3門跡周辺及び西側・南側土壘線の一部の城壁構造を把握したことになる。門跡周辺においては、先述したとおり、深迫門跡で版築盛土による土壘、堀切門跡で切・盛土による2段構造の土壘、池ノ尾門跡で透水溝を伴う石垣(土垣併用か)をそれぞれ採用し、西側土壘線においては北端近くの約50mの区間で、南側土壘線においては南西隅の約75mの区間で版築盛土による土壘を採用する。また、同じ土壘でも、地点毎に土質の違いや

石列の有無などに相違が認められ、池ノ尾で検出した土壘のような基底部に敷石を伴うものなど細分化が可能である。

このように、地点により相違する外郭構造のあり方は、それが立地する自然地形に応じてその形態及び構造の選択が行われた結果といえる。このことから、鞠智城跡の外郭構造については多元的な様相を呈するといえ、細部にわたり検討を加えていくことが今後の課題である。

〈参考文献〉

熊本県教育委員会編 1968 昭和42年度埋蔵文化財緊急調査概報『伝鞠智城跡』

熊本県教育委員会編 1983 熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』

熊本県立裝飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館編 2005 『鞠智城跡—第25次調査報告一』

〈参考〉馬こかしの石垣・三枝の石垣について

鞠智城跡の外郭線上には、「馬こかしの石垣」と「三枝の石垣」という二つの石垣が所在する。昭和42年度の第1次調査時に測量調査が実施された際、一部に矢穴の痕跡が確認され、同時代の遺構としては認識されないまま現在に至っている。

今回、池ノ尾において石垣が検出されたことから、再調査による見直しを図ることが今後の課題といえる。

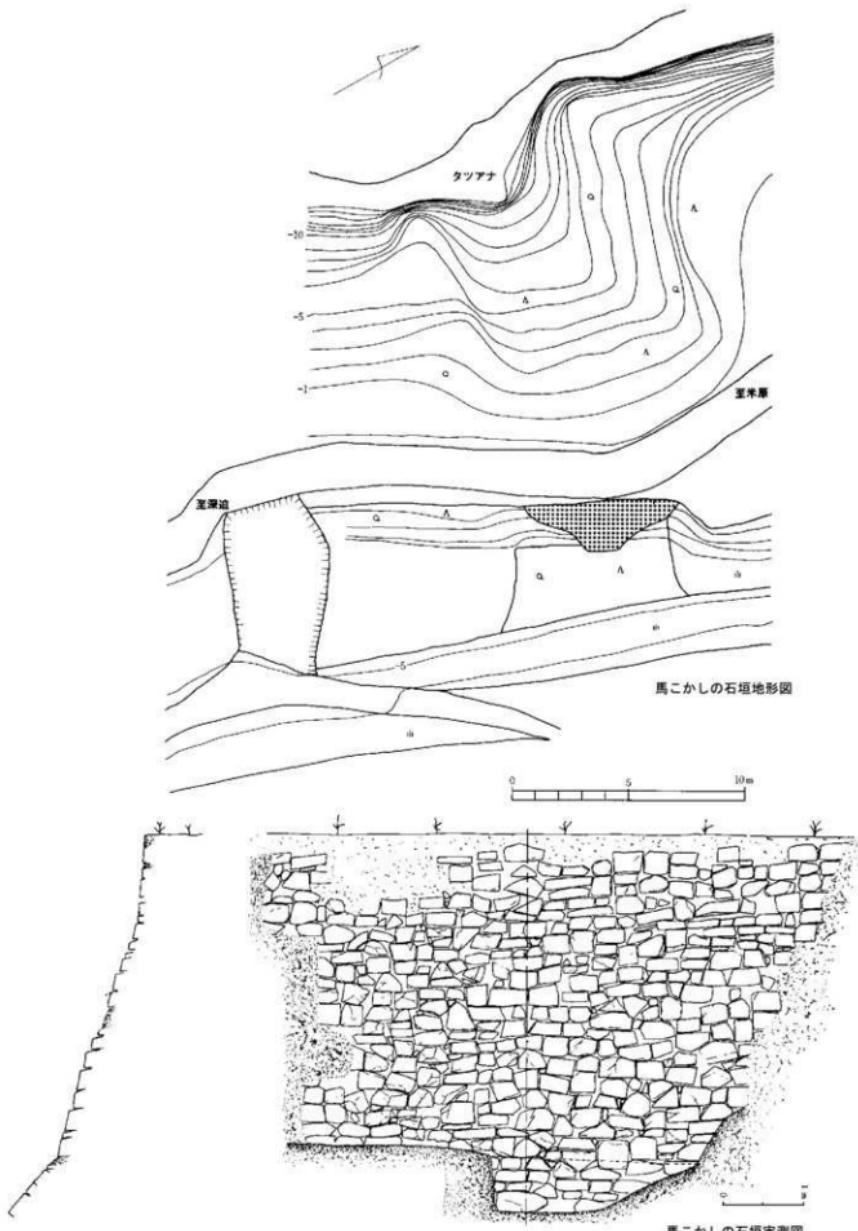
ここでは、「馬こかしの石垣」、「三枝の石垣」の所見について、熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』から再掲する。

馬こかしの石垣

「深迫門礎から米原に進む場合どうしても通らねばならない通路がこの「馬こかし」である。この地点は通路が急にせまくなり要衝の地といえる。現在東側は水田が湾入し、西側は軟弱な凝灰岩を鋭くえぐった自然の崖になっている。この馬こかしの通路は坂本経堯氏の記憶によると、昭和初年には非常にせまくて丸太棒を渡してあり、現存する東側の石垣については草木が繁っていてよく分からなかったとのことである。しかし地元の老人の話では石垣を築いた記憶もなければ、祖先が築いたという言い伝えも残っていない。したがって石垣の築造時期は分からぬにしてもかなり古い築造であることがいえる。

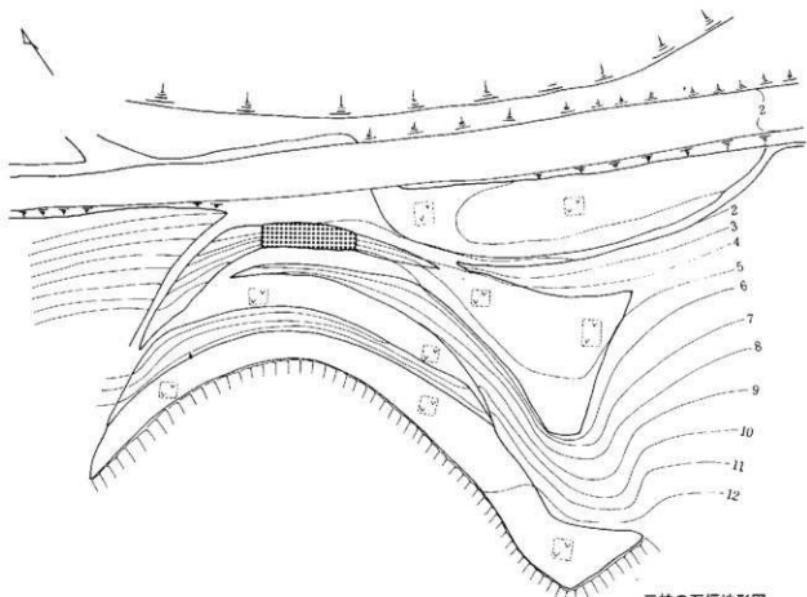
さて石垣は先述のとおりこの通路の東側にのみ認められる。その規模は長さ約6.6m、高さは約4.3mまで確認できる。傾斜は断面図（第25図）に示すように非常に急勾配で、上から約2mまではややそり気味であるが、その下約3.8mまでは幾分ふくらみをもち、それ以下は根固め状に裾を広げている。石材はほとんど凝灰岩を加工して使用し、一部に安山岩質のものを認める。石垣の築造状態は、ほぼ長さ30～60cm、厚さ10～30cmの切石をほとんど水平に積みあげ、すき間には小形の石をつめこんでいる。なお石垣の奥行きについてはその深さ、形状ともに不明である（第25図）。

石垣の裏に当たる西側の崖は目のくらむような急傾斜で、水平距離にしておよそ10

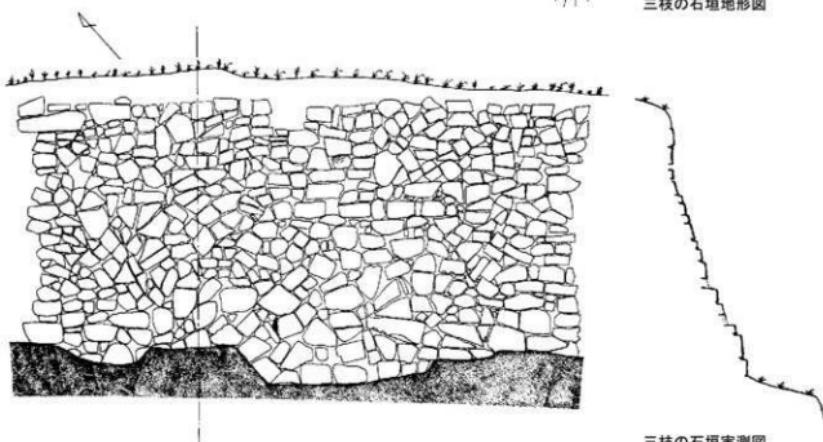


第25図 馬こかしの石垣（熊本県教育委員会編 1983）

mで12 mの落差があり、さらにそこからはほとんど切り立ったようになっていて、道路面との比高16.5 mを計る。崖の最深部は俗に「タツアナ」と呼ばれており、降雨の



三枝の石垣地形図



三枝の石垣実測図

第26図 三枝の石垣（熊本県教育委員会編 1983）

ときは流路となる。タツアナから上を見上げると、凝灰岩の浸蝕崖がちょうど屏風のように切り立ち、その間からわずかに空が見えるといった感じである。」

三枝の石垣

「三枝石垣は米原・一寸櫻方面をむすぶ道路筋に在る。米原台地の南側北崖にそって道路は連なる。石垣付近の地形（第26図）は、東西に走る道路の南、北側がかなり急な崖線をなす。

石垣は道路の南面に位置する、道路をはさんだ北側崖には石垣は認められない。しかし、崖の基部に数段にわたって石垣を築いている。

石垣についてのべる（第26図）とその長さは約8.30m。高さ約4.30m。中央部の傾斜は約75度を有する。石垣は15～20段形成されている。石材はほとんど凝灰岩で大きさ約50cm×70cmの切石を用いている。

石垣上部の二段は下部の築造と異り石材は同質であるが、切石を用いて上面を水平に保ち、全体に安定感がある。とにかくこの部分は後世補強したものであろうか。最下部の石垣の築造にあたっては比較的大きな切石を用いて赤土層にくいこませている。

石垣の築造にあたっては空隙の充填に意がそそがれ、切石間の間隙には不定形ではあるが、断面の平らな石材で補強している。

全体的に築造に当っては、下石は左斜めにおかれ、上石は右斜めされている。上石が右に落ちようとする力を下石の支点が左側におかれている。このような「組み方」は一般に「右きき」の人の手法が多いという。石組みの一部に矢を打ちこんだ痕とみられるものも認められた。石垣を中心とする附近から遺物の発見はなかった。」

写 真 図 版

図版 1



池ノ尾門遠景（東から）



池ノ尾門近景（北西から）

図版2



池ノ尾門跡調査区全景（東から）



池ノ尾門跡調査区全景（真上から）

図版 3



池ノ尾門跡石壁全景（真上から）

図版4

鷹智城跡（池の尾門跡）



池ノ尾門跡石塁（オルソ画像図）

図版5



前面石列①（北東から）



前面石列②（北西から）

図版 6



石壠前面北東側①（東から）



石壠前面北東側②（北から）

図版 7



背面石列①（北西から）



背面石列②（南東から）

図版 8



石壘背面①（北東から）



石壘背面②（南東から）

図版 9



石塁背面と通水溝（東から）



通水溝全景（南東から）

図版 10



透水溝取水口（南東から）



透水溝側壁（南西から）

図版 11

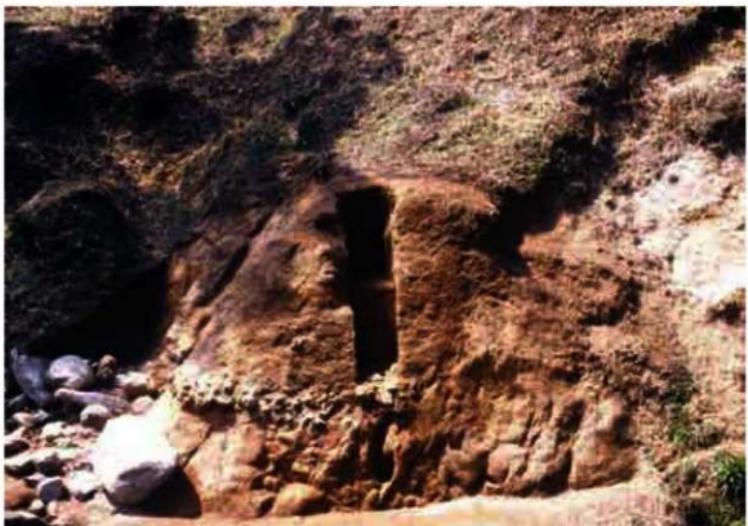


取水口と導水溝（南から）



導水溝側壁（北西から）

図版 12



土壘全景とその周辺（北東から）

図版 13



土壠全景（東から）



土壠基底部における敷石状況（東から）

報告書抄録

ふりがな	きくちじょうあと						
書名	鞠智城跡						
副書名	第26・27次調査報告						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	矢野裕介						
編集機関	熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館						
所在地	熊本県山鹿市菊鹿町大字米原443-1						
発行年月日	2006(平成18)年3月31日						

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
史跡 鞠智城跡	くすもとけんやまと。 熊本県山鹿市 まつらまちよなはざま 菊鹿町米原			北	東	(自)20040726 (至)20050330	約5,000 m ²	遺跡整備
	くすもとけんきくち。 熊本県菊池市 きの 木野			北	東	(自)20050629 (至)20050324		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鞠智城跡	史跡	古代	池ノ尾門跡 石壠 前面石列 背面石列 通水溝 取水口 土壠 版築盛土 敷石		池ノ尾門跡調査区において石壠等の遮蔽構造を解明

鞠智城跡

— 第26・27次調査報告 —

平成18年3月31日

編集発行 熊本県立装飾古墳館分館

歴史公園鞠智城・温故創生館

〒861-0425 熊本県山鹿市菊鹿町米原443-1

TEL (0968) 48-3178

印 刷 株式会社大和印刷所

〒862-0931 熊本市戸島町920-11

TEL (096) 380-0303 (代表)

この電子書籍は、鞠智城跡 第26・27次調査報告を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書
館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法
は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡 第26・27次調査報告

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2022年6月15日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは
熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>